

## 犬の口腔内悪性黒色腫の治療成績および予後に関する多施設間研究：165例

小林哲也<sup>1)</sup>, ○中野優子<sup>1)</sup>, 渡部あい<sup>2)</sup>, 廉澤剛<sup>2)</sup>, 伊藤祐典<sup>3)</sup>, 丸尾幸嗣<sup>4)</sup>, 藤田道郎<sup>5)</sup>  
鷲巢月美<sup>6)</sup>, 今井理衣<sup>7)</sup>, 石田卓夫<sup>7)</sup>, 藤野泰人<sup>8)</sup>, 辻本元<sup>8)</sup>

1) 日本小動物がんセンター 2) 酪農学園大学獣医臨床腫瘍学研究室  
3) 岐阜大学応用生物科学部附属動物病院 4) 岐阜大学附属比較がんセンター  
5) 日本獣医生命科学大学獣医放射線学教室 6) 日本獣医生命科学大学獣医臨床病理学教室  
7) 赤坂動物病院 8) 東京大学獣医内科学教室

【背景と目的】犬の口腔内悪性黒色腫は、生物学的挙動の悪い腫瘍性疾患の一つとして報告されているが、国内での多施設間研究はなされていない。本研究は、国内6施設で治療された犬の口腔内悪性黒色腫の治療成績および予後因子について調査した。

【方法】2000年1月～2010年12月に国内6施設に来院し、病理組織学検査で口腔内悪性黒色腫と診断された犬のうち外科治療、低分割放射線治療、外科治療＋低分割放射線治療のいずれかを主治療とした165例を回顧的に調査した。年齢、犬種（ゴールデン・レトリバー vs. その他）、性別、体重、腫瘍発生部位（口唇頬粘膜 vs. 下顎歯肉・上顎歯肉・舌・口蓋）、ステージ、主治療様式、白金化合物投与の有無と生存期間との相関を解析した。生存期間は治療開始日～死亡日と定義した。生存期間はKaplan-Meier生存曲線、単変量解析にはlog-rank test、多変量解析にはCox proportional hazard modelを使用した。p<0.05を有意差ありと判定した。

【結果】年齢の中央値は12.1歳（3.0～18.0歳）で、ゴールデン・レトリバー（n=22）が最も多く来院した。99例が雄（去勢雄45例）、66例が雌（不妊雌34例）で、体重の中央値は12.2kg（2.1～39.7kg）であった。白金化合物は39例（カルボプラチン38例、シスプラチン1例）で投与されており、その投与回数中央値は4回（1～12回）であった。全症例の中央生存期間は223日（11～2,629日）であった。外科治療群（n=50）の中央生存期間は383日（11～1,553日）、低分割放射線治療群（n=56）の中央生存期間は203日（19～2,629日）、外科治療＋低分割放射線治療群（n=59）の中央生存期間は218日（27～1,316日）で、各治療様式と生存期間に有意差は認められなかった（p=0.3778）。多変量解析では年齢、犬種、体重、腫瘍発生部位、ステージ、白金化合物投与の有無が生存期間と相関した。口唇頬粘膜に発生した悪性黒色腫と比較して、上顎歯肉、下顎歯肉、口蓋に発生した悪性黒色腫のハザード比は、それぞれ2.6（95%CI:1.3-5.4、p=0.008）、2.3（95%CI:1.2-4.4、p=0.01）、3.8（95%CI:1.4-10.5、p=0.01）であった。

【考察】本研究の結果、国内における口腔内悪性黒色腫の治療成績および予後は過去の報告とほぼ同等であることが確認された。有意差が認められた予後因子の中でもステージが最も強く生存期間と相関したことから、治療方針を決定する際のステージングの重要性が示された。また、口腔内悪性黒色腫の予後は発生部位によって異なる可能性と白金化合物投与によって生存期間が延長される可能性が示唆された。